

## 7月例会報告

7月例会は7月22日(土)に三ツ城地域センターで行われ、25人が出席した。冒頭、赤木会長が「連日、命の危険が伴うような猛暑が続いています。そんな中、ウクライナでは停戦が期待されていたにもかかわらず、戦闘が激しさを増すばかり。原爆展の準備も進んでいる中で、しっかりと平和を見つめていきたい」と挨拶した。

例会発表は天野浩一郎氏による「竹内家と竹内家文書」。竹内家の初代、儀左衛門は周防大内氏17代大内義長の長男と言われ、弘治3年(1557)に山口から吉川に移住したとされる。寛政3年(1791)に吉川村庄屋の役職に就いて以降、西条、高屋、志和で割庄屋などを務めるなど、村役人として活躍した。発表では、竹内家が徐々に財力を蓄え、大口不動産購入を行っていたことも紹介された。

また、発表テーマの一部となった「竹内家文書」に関しては、来月以降、郷土史研究会ニュースの記事として掲載予定である。

<7月例会参加者(敬称略)>

国永昭二、近藤英治、國松宏史、谷本操、重竹訓江、福村博士、藏楽知昭、船越雄治、浮田一民、藤井達正、赤木達男、宍戸元文、西本嘉住、胡隆、横川知司、角谷勉、藏楽恭子、木村浩男、丸本富美子、木原敏博、間瀬忍、大森美寿枝、藤原美春、進藤真由美、西谷勝彦(25名)

## 白市に残る俳諧史跡

浮田 一民

### 白市の俳諧遺産

鎌倉時代に秋田から地頭として平賀氏が入部した白市は、以後、連綿として広島県内の文化の一翼を担ってきた。なかでも、中世から近世にかけて大流行した「俳諧連歌」(略して俳諧)がこの白市の地に根付いたのは当然のことであったと言える。

### 8月例会のご案内

日 時 8月26日(土) 13:30~

場 所 三ツ城地域センター

(旧下見福祉会館)

研究発表 「文化財から見る我が町の歴史

—安芸国分寺跡—

東広島市文化課調査係長 石垣敏之氏

俳諧は「庶民の文芸」と称されている。和歌などと比べて一段低い文学であると誤った認識をしている人も多い。しかし、伊勢神宮の祀官荒木田守武や近世俳諧を統括した五撰家の一つの子条家など、多くの貴族や大名、旗本も俳諧に遊んでいる。しかし、圧倒的に人口の多い庶民の俳諧活動が膨大に記録・保存された結果、その庶民の活動だけを見て、「庶民の文芸」だと誤った評価を下してしまったのである。正しくは、俳諧は「庶民にまで広がった文芸」と表現すべきものである。

俳諧も明治になって正岡子規による「俳句」運動が起こると、さしもの「俳諧連歌」もあつと言う間に「俳句」に取って代われ、現在では「俳諧」と言う言葉さえも忘れ去られてしまった。

その俳諧の遺産とも言うべきものが、白市には2点も現存しているのは「さすが、白市」と言った感であるが、これもまた歴史の闇の中に“今、この瞬間に”消え去ろうとしているのである。

この消え去ろうとしている白市の俳諧史跡は1点目が光政寺(写真1)の「奉納俳諧額」(写真2)であり、2点目は光政寺裏山にある石碑「鶯塚」(写真3)である。今回はこの2点にスポットを当てて、多くの人にその存在を知ってもらい、且つ保存に向けて尽力していただきたいと思うのである。

### 光政寺の「奉納俳諧額」



(写真1)



(写真2)



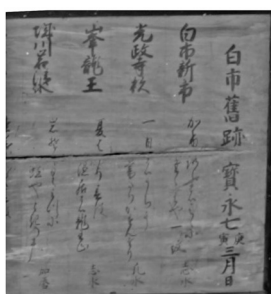
(写真3)

光政寺は白山城の城主平賀弘保が文亀3年(1503)に建立したと伝わる古刹であるが、檀家が一軒もないと言う特殊な事情で現在は崩壊寸前と言った状態になっている。

この光政寺本堂の外陣の長押上に「俳諧額」が掲額されている。俳諧額は縦約45.0cm、横約226.5cmの大きさで、黒漆塗りの木枠に杉又は桧と思われる板が嵌め込まれ、その板に9名の俳人による30句が墨書されている。俳諧額冒頭に「寶永七甲寅三月日」(写真4)、末尾に「所願成就施主志水」(写真5)との記載から寶永7年(1710)に志水と言う俳号の人が、所願成就を祈って奉納した「奉納俳諧額」であることがわかり、310数年の時を経たものとは思えないほど保存状態は良好である。



(写真5)



(写真4)

### 広島県内の俳諧額

江戸時代260余年間に広島県内の神社仏閣に奉納された俳諧額は、古記録や過去の調査などを元に調べたところ約120点の俳諧額が存在していたことが確認できた。この内、現存するものは僅か49点であった。

記録された約120点の俳諧額のうち、最古のものは天和3年(1683)に両社八幡宮(現 福山八幡神社)に奉納されたと記録のある奉納俳諧額である。2番目が寶永7年(1710)の光政寺奉納俳諧額であった。福山八幡神社の俳諧額は残念ながら滅失しており、現存する俳諧額で最古のものは光政寺の奉納俳諧額ということになる。現存する県内最古の俳諧額としてもその貴重性は特筆すべきものである。

### 蕉風俳諧の伝来と白市

松尾芭蕉は元禄7年(1694)十月十二日、大

阪御堂筋花屋裏の貸座敷に於いて死去した。享年五十一歳であった。芭蕉は明石から西には来ていない。芭蕉死後、その十大弟子と呼ばれた門弟達によって芭蕉が足を踏み入れたことのない地方に蕉風俳諧(松尾芭蕉風の俳諧)が伝えられた。

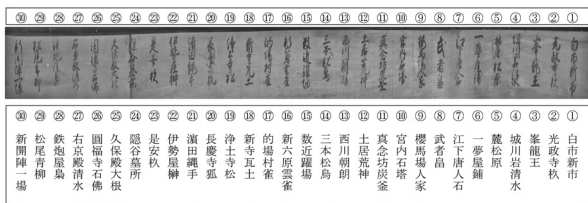
広島県へ最初に蕉風俳諧を伝えたのは各務支考であった。支考の九州への旅日記である「梟日記」の元禄11年(1698)四月十六日の項に備中から備後鞆に上陸し尾道を経て、翌十七日に安芸国竹原の一雨亭泊、翌十八日は梅睡亭に宿泊し、十九日西条四日市泊、広島を経て廿二日に宮島に至り廿五日に周防国岩国に到着した旨を記している。備後国の鞆や尾道は素通りであり、広島や宮島と比べると随分田舎である竹原に2泊もして地元の俳人たちと交流しているのは、竹原には既に各務支考を引き付けるだけの高い教養を持った人たちが存在していたからにはほかならない。

寶永2年(1705)に刊行された竹原一雨(梟日記に出る)の追善供養集には「一故」の俳号が見え、光政寺の俳諧額にも「一故」の俳号が見える。白市の豪商木原家は、竹原に塩田を経営しており白市と竹原の繋がり深い。軽々には断定できないが、各務支考が竹原に伝えた蕉風俳諧の席上にも白市の人々が一座していたことは十分に考えられることである。

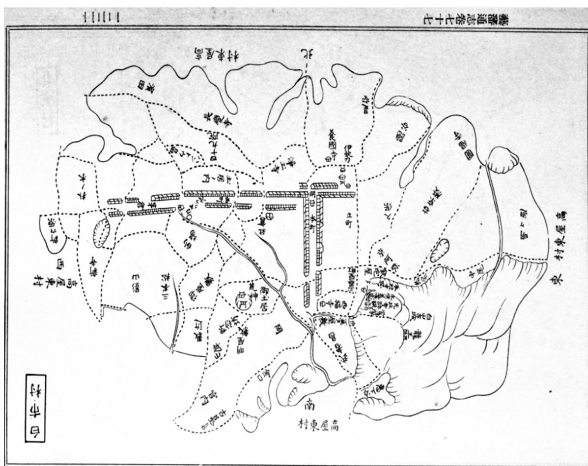
### 光政寺の俳諧額と蕉風俳諧

光政寺の「俳諧額」の特徴は俳諧額冒頭に「白市舊跡」と記載があり、各句の上部に「白市新市」とか「光政寺杉」、「峯龍王」などと標題のような記載(写真6)があることである。この標題のような記載が何を意味しているのかが全く分からなかったため、今までこの俳諧額は俳諧の垂流である「雑俳」に分類され、作成年代が古い割には評価する者は誰もいなかった。

しかし、江戸時代の文化文政年間(1804~1829)に広島藩が調査作成した「芸藩通志」の中の「白市村絵図」(写真7)に記載された地域名と、光政寺俳諧額の「標題のような記載」とが一致しており、「標題のような記載」は白市村内の地域名に風景を組み込んだ「兼題」の可能性が認められたのである。「標題のような記載」を「兼題」として各句を鑑賞すると、「雑俳」や西山宗因の談林派、松永貞徳の貞門派とはかけ離れた句風であり、外観の風景を内面の心象として捉える松尾芭蕉風の作風に近いものであることがわかるのである。



(写真6)



(写真7)

光政寺俳諧額的重要性

以上見てきたように光政寺の俳諧額は

- 1 現存する県内最古の俳諧額である。
- 2 蕉風俳諧が広島に伝播した最初期の作品である。
- 3 保存状態が良好で判読が可能である。
- 4 権力者の文化ではなく庶民の文化である。

など、広島県の近世文化史の一頁を飾る記念碑的な存在なのである。

(つづく)

追悼・湯川昌さん

永遠の思い出やさしさをありがとう

吉田 泰義



起

私と湯川氏の出会いは、24年前に遡る。(社)東広島市観光協会事務局長湯川氏が始められた、ボランティアガイド養成講座を受講しガイドとしてデビュー、10年余り休日は毎週のように西条四日市酒蔵通りを中心に、酒まつり、東広島

を歩くなど楽しんで、酒酌み交わし付き合いました。

湯川氏が渡部和代氏の勧めで郷土史研究会に入会され、湯川氏と私は田坂次彦事務局長を助けて総務と理事を努め公私共々に付き合いましたが、病に倒れられ6年の闘病の末に亡くられました。

承

思い出は数限りなくありますが、研究会ニュースを振り返り湯川氏の足跡を紹介します。

No.419、2009・7 「東広島郷土史研究会に入会して」昭和16年、父湯川計、母ノブコの四男として西条町吉行で出生。湯川家は曾祖父新平が広島藩勘定奉行湯川経登から知行地である賀茂郡吉行村の給庄屋を仰せつかり、四日市宿駅の人馬御用係も努め、湯川姓を与えられたとある。

今やりたいことは、西条町を今日に導く基礎を築いた方々の足跡を検証し、特に御建神社や周辺の記念碑や石造物など、今の人たちに分かりやすく伝えたい。

No.437、2011・1 「第20回東広島市生涯学習フェスティバル出展の記」日本人と竹の文化展示と体験コーナー共に大盛況でした。

No.454、2012・6 「育英学校の資料の寄託を受ける」創立者石井群造先生の蔵書

No.469、2013・9 「武将茶人 上田宗箇」

湯川氏は風流を愛され茶人でもありました。広島市古江に和風堂を郷土史特別例会で参りました。

No.478、2014・6 第30回歩く会「西条駅周辺を巡る」中央公園～賀茂高校～サタケ～諏訪神社～御建神社～安芸国分寺～西條農学校跡のコース、入会時に述べられていた、御建公園周辺の石碑を現代文に解説されました。

No.495、2015・11 「大名庭園と縮景園(御泉水庭園)」上田宗箇が築庭した縮景園について詳しく発表され、郷土史特別例会を開催されました。

転

湯川氏と同行した臨地研修旅行も忘れられません。

【京都】(泊) 平等院、醍醐寺、寺田屋 ★湯川旅行委員長に協力して旅行委員の3年間、男性は湯川、中原、木村、佐田友、吉田と、女性は大森、渡部、吉原が会合を重ね企画から実行、コースの下見が特に楽しくお笑い珍道中、泊まりの宴会ではみんな笑って歌って踊った湯川氏の笑顔と語らいに郷土史会員みなさん和我しました。

- 【島根】 益田市、雪舟と柿本人麻呂の事績  
 【鳥取】 (泊) 伯耆の歴史、鹿野・鳥取・智頭  
 【香川】 丸亀城と桜～中津万象園を訪ねて  
 【奈良橿原、和歌山、大阪堺】 (泊) 巡る  
 【兵庫】 但馬国、竹田城跡、生野銀山  
 【山口萩～防府】 (泊) 大内と毛利の文化  
 【愛媛県今治市大島】 研修委員打ち上げ会  
 その後の臨地研修旅行2年間、相席で酒を酌み交わしながら語り合い忘れられません。  
 【兵庫】 姫路から天駆けた黒田官兵衛  
 【福岡、大分】 (泊) 官兵衛、中津～福岡  
 【岡山】 備中高梁市の史跡を巡る  
 【島根】 (泊) 国宝を巡る 松江城と出雲大社

★永遠の思い出 ありがとうございます。  
 結

至徳院釋法昌 俗名 計四男 昌  
 令和四年十二月二十一日  
 午前一時三十九分寂 享年八十一歳  
 西条町吉行墓地にて 合掌

## 【広島を歩いたベトナム象 3】 広島城下にベトナム象が来たゾー

赤木 達男

一国一城令に先立って消えた亀居城跡を背に玖波宿(現大竹市玖波)を4月6日の朝五つ頃に発った(であろう)ベトナム象は、6里余りの道程を歩きその日の夕刻、芸州広島藩の城下に入ります。岡山藩に残された文書「象御領内通候一件」の中には、「象広島へ去る6日の晩七つ時(午後4時)前着、7日の朝五つ半時(午前9時)出足」と記されています。



身近な地ですので、象が歩いたであろうルートを紹介いたします。玖波宿(本陣)⇒残念社⇒妹尾の滝⇒千人塚⇒十郎原⇒津和野岐⇒佐伯郡役所跡⇒廿日市宿(本陣)⇒桜尾城跡(廿日市)⇒

塩釜神社(佐伯区)⇒草津⇒源左衛門橋(広島市西区)⇒天満宮⇒広島宿です。これらの地には、それぞれに謂われ(歴史)が刻まれています。関心のある方は調べてみてください。

### 堀をくり抜き作られた象小屋

『広島市史』に「四月六日、交趾国(注1)より貢せる象一頭、將軍の召により、長崎より江戸に赴く、途中広島を通過し、是日堺町二丁目馬頭(注2)助兵衛の後庭に次す、藩主吉長(注3)、同町沢村屋に臨み之を観る」と記されています。

広島県立文書館が2016年に開講した「インターネット版古文書講座」(第6回)資料にも、「象は4月6日に広島城下に到着した。その宿所は、広瀬組堺町二丁目(現広島市中区堺町一丁目)あたりの馬継場(注4)の後庭があてられ、隣家の芥川屋との境の堀をくりぬいて小屋を作り泊ませた。」と紹介されています。

下の地図は江戸時代初期の「広島城下町古地図」で、中央を東西に走っているのが西国街道です。象が泊まったのは本川橋西詰から天満橋東詰の辺りの堺町にあった広島西宿近くだったと思われます。この辺りに馬継場(伝馬駅)、馬頭の助兵衛宅、芥川屋、沢村屋などが軒を連ねていたのでしょう。

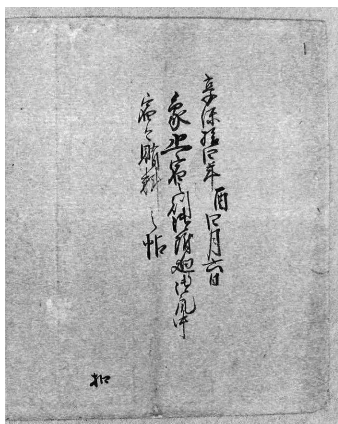


### 古文書が紐解いてくれたベトナム象の宿

次ページの写真は、「享保14年西4月6日 象止宿之刻御附廻り御衆中 宿々賄料之帖」という、象の運送に携わった人たちの宿泊料に関する広島藩の文書で、前述の県立文書館「インターネット版古文書講座」で使われたテキストです。

囲みは約300年前の帳面の4枚のうちの1枚の一部分です。中嶋庄右衛門という人と家来の夜食と朝夕の3回の賄い料、計銀2匁7分。但し御切手1通これあり、と書かれています。

長崎奉行所が各藩に出した「御触」には、「旅籠料理一汁三菜、酒三遍、肴一種、上下これ無く、代1匁」とありますが、実際には身分の違いで料理の内容が違ってきます。身分の上下による賄方の「付度」なのでしょう。郷土料理が振る舞われたのでしょうか。「一汁三菜」のメニューは何だったのでしょうか？関心が湧きます。



同テキストには、続いて「…文章が残されたのは、宛所となっている城下広瀬組大町年寄り芥川屋に残されたものと考えられるが、これが見つかったのは、山県郡北広島町大朝の郷土史家の久枝秀夫氏（故人）宅の襖の裏張りからである。広島城下芥川屋に伝わった帳面が襖の下張りの材料としていつの日か山県地方まで流れていたわけである。」と紹介しています。

#### 北広島町で見つかった貴重な資料に思う

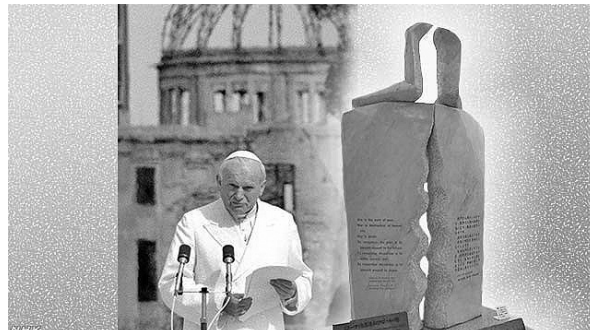
それにしても、広島城下から大朝町の久枝家に“いつ頃”、“どのような経緯”でたどり着いたのでしょうか。“なぜ襖の裏張り”に使われ、“どのような経過で発見された”のでしょうか。

もしも、そのまま広島城下の芥川屋に残っていたなら原爆で焼かれ、私たちが目にすることは出来なかったかも知れません。そう思うと、大朝までどのようにして運ばれ、どのように発見されたのか……と、関心は一層募ります。

同じように数奇な運命をたどり、原爆や戦禍を免れ発見されるのを待っている古文書が、今もどこかに眠っているかも知れません。開発や世代交代、歴史や文化に対する認識の変化などに伴い、大切な歴史的な遺産が人知れず急速に失われていると思うと居たたまれません。

遺跡や史跡、伝統文化や古文書は国民的財産

です。意図的に歴史を歪曲したり、歴史を紡ぐ営みの記録を消し去ったり改竄することは許されない犯罪行為です。一方、無意識のうちに連続と続いてきた貴重な歴史的財産が失われていくことも、未来への大きな損失です。



ローマ・カトリック教会のフランシスコ法王と法皇の言葉が刻まれた平和記念資料館の石碑  
(NHK NEWSWEB より)

「歴史とは、過去と現在との間の尽きることのない対話」(E.H.カー)、「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目になる」(ヴァイツゼッカー)、「過去をふり返ることは将来に対する責任を担うこと」(ヨハネ・パウロ二世)……。

賢人たちが異口同音に「歴史との対話が大切」と語っています。

次号ではいよいよ、広島から西条四日市宿までの旅を追って見たいと思います。(つづく)

(注1) 交趾国：古くはベトナム北部地域を指していたが、16世紀以降中部地域を含め交趾と呼ぶようになり、象が送られた当時は北部(ハノイ)から中部(ホイアン)にかけて交趾国と呼ばれていた。

(注2) 馬頭：宿場毎に伝馬の常備が義務づけられ、その手配・差配をしたのが人馬方とか馬頭、人馬役と呼ばれた。

(注3) 浅野吉長：1681～1752年、安芸国広島藩の第5代藩主。現在の修道中学校・修道高等学校の礎となる「講学所」を開く。

(注4) 馬継場：駅で馬を交換したり休憩させ物資や人や情報を運ぶシステムを駅継とか伝馬制と呼んだ。江戸時代になると、公用に限らず宿継の荷駄馬を広く「伝馬」と通称。西条四日市宿では15匹の馬の常備が義務づけられていた。

#### 第45回県史協福山大会 参加者募集

日時：令和5年11月11日(土)

場所：まなびの館ローズコム4階大会議室

申込：例会時又は國松宏史 090-7979-6234

〆切：8月26日(土) 8月例会まで

資料代 ¥1,000— 弁当代 ¥1,200—

**臨地例会（三次市）参加者募集**

**日 時** 令和5年9月30日(土)  
午前8時30分発

**場 所** 広島県立みよし風土記の丘周辺

**集合場所** 西条・鏡山第二駐車場  
(市役所横・福富道の駅)

**参加費用** 1,000円(交通費含む)  
※各自昼食・飲み物は用意

東広島市社会福祉協議会マイクロバスを使用

**コース**

鏡山第二駐車場→市役所横→道の駅湖畔の里福富(トイレ休憩)→三次風土記の丘(学芸員の案内・資料館→古墳散策)・昼食→矢谷古墳(国史跡・四隅突出型)→照林坊(国登録有形文化財)→史跡寺町廃寺跡→福富道の駅→市役所横→鏡山第二駐車場(解散)

(午後4時ごろ帰着予定)

**見どころ**

全国で確認されている古墳、約16万基のうち、広島県には約11,000基近くがあります。これは全国第6位の数です。中でも多く残っているのが、三次盆地。県内にある古墳の3分の1、4,000基余りの古墳が集中する古墳密集地帯となっています。東広島市内には約700基ほどありますが、その6倍近い数です。

三次盆地に古墳が急増したのは5世紀頃と考えられており、その時代はヤマト王権が大陸との国際交流を活発化した時期と重なります。三次盆地には多くの川が集まって、大内川の川となり日本海に流出していることから、日本海側(石見・出雲)、瀬戸内海側(吉備・安芸)と三次(備後)地域との交通・交易の動脈が形成されていたと推察されています。

内陸の盆地にこれほど多くの古墳が築かれた理由は謎に包まれています。内外情勢の変動の折、川を通じて、外来、渡来系集団(百済・伽那の朝鮮半島南部)の移住があり、馬洗川流域に多く古墳が形成されたのではないかと考えられています。

この度の臨地例会では、みよし風土記の丘県立資料館で出土した展示品・古墳群を学芸員の方に説明をしていただく予定になっています。

東広島市は県内最大である三ツ城古墳がある場所です。この機会に古墳文化の面白さを深めていただければ幸いです。

(参加希望者は大森までご連絡ください)

**〈新会員ご紹介(敬称略)〉**

進藤 光 東広島市西条町寺家

**《《新規会員募集中!》》**

活動の様子がお知りになりたい方はQRコードを読み取ってのぞいて見てね。郷土史研究会ニュースもあるよ!



HP



Instagram



Facebook

**グループ研究会ご案内****古文書研究会**

8月はお休みします。

**石造物研究会**

8月はお休みします。

**四日市町並研究会**

8月はお休みします。

**山城探訪会**

8月、9月はお休みします。

**原爆資料保存研究会**

と き 8月17日(木) 14:30~

ところ 市役所北館 市民協働センター

**8月の図書室開放**

と き 8月18日(金) 13:00~15:00

ところ 高屋教育集会所

**ひがしひろしま郷土史研究会ニュース  
第588号**

令和5年(2023)8月5日発行  
編集・発行 東広島郷土史研究会

会 長 赤木達男 TEL(082)423-7235

E-mail:akata@akata.dion.ne.jp

事務局長 國松宏史 TEL090-7979-6234

E-mail:kunimatsu402@hi3.enjoy.ne.jp

会報編集 間瀬 忍 TEL080-5756-2303

E-mail:mase shinobu@yahoo.co.jp